

中井正一における集団的コミュニケーションの観念

門 部 昌 志

Les idées de la communication collective chez Masakazu Nakai

Masashi MOMBE

Résumé

L'esthéticien japonais, Masakazu Nakai (1900-1952) est connu pour son célèbre article «la logique du comité : première ébauche» (1936), ainsi que pour son engagement dans le mouvement culturel du contre fascisme. D'ailleurs, il est considéré comme un des précurseurs de l'étude sur la communication au Japon. En ce qui concerne les écrits de Nakai, des travaux qui extraient les éléments concernant la communication ont été entrepris. Ces derniers ne sont toutefois pas exhaustifs et non encore achevés. Cet article est un essai de réinterprétation des écrits de Nakai du point de vue de la «communication collective». Nous aborderons d'abord les notions de la communication qui ont un rapport avec les idées des médias. Ensuite, nous discuterons les idées de la collectivité. Ces différentes problématiques concernant les médias, la communication, la collectivité peuvent être une clé permettant la lecture de cet article, «la logique du comité: première ébauche».

ホイッスルが鳴って、一斉にラグラーが動き始める。ボールが落ちた瞬間、味方はもちろん、敵の各々があるべき位置に動いていく。ボールをめぐる、「見えざる力の波紋が次から次へと二方向的に作用する」かのようなのである。かつて「スポーツの美的要素」を論じた際、美学者、中井正一（一九〇〇～一九五二）は、ラグラーのダイナミックな動きの中に「息もつかせざる関係の構成」を見出した。この感覚は彼にとって「新しき芸術の要素」だったのであり、ラグビーは「瞬間崩れゆく美しさ」を喚起するものと見なされた¹。もっとも、一般的には、難解さをもって知られる論文「委員会の論理 — 一つの草稿として —」（以下、本文中では「委員会の論理」とする）、また反ファシズム文化運動への関与によって中井は記憶されているはずである。

さらに、中井は日本のコミュニケーション研究における先行者の一人と見なされてきた。彼の論考については、コミュニケーション論的要素を抽出する研究がなされてきたが²、それらは徹底的なものではなく、いまだに完成されてはいない。本稿は、〈集団的コミュニケーション〉という観点から中井の諸論考を解釈する一つの試みである³。私たちは、中井におけるコミュニケーションの観念 — これはメディアの観念に係る — に取り組み、次に集団の観念を論じるであろう。メディア、コミュニケーション、そして集団に関するこれらの諸問題は「委員会の論理」を読むための手がかりとなる。

第一節ではまず、言語に関する中井の諸論考に注目し、メディア、およびコミュニケーションの諸問題について述べる。一九二〇年代および一九三〇年代における彼の論考には、すでに言語媒体への関心が、またその歴史の変遷への関心が見出せる。言語的コミュニケーションに関して言うならば、中井は言語活動をラグビー — 二つのチームからなるゲーム — に譬えており、この比喻を用いて発言と聴取の区別と交叉を論じている。第二節では、集団概念および集団的芸術をめぐる中井の探求をたどりながら、集団的思惟の構想について述べる。中井における〈集団〉の観念を考慮する上で重要なのは、第一に、それが相互依存的な関連形態として捉えられていると同時に、集団における対立や分裂の契機についても言及されている点である。第二に、集団的思惟の構想を発展させる手がかりとして、中井は集団的組織化の進行していた映画に注目した。映画を一つの手がかりとして、彼は委員会的討議や批判会など、集団的思惟のモデルを提示している。第三節では、「委員会の論理」を概観する。この論考は、第二節までに言及した諸論点 — メディアとコミュニケーション、集団及び集団的思惟 — が発展的に組み込まれたものであり、集団的コミュニケーションの観念を明確化する手がかりになると考えられる。既に述べたように、「委員会の論理」を執筆する以前、中井は映画を手がかりとして集団的思惟の構想を発展させていたのであるが、戦後になると数多くの映画論を発表する。第四節では、これら戦後の映画論を集団的思惟との関連から検討する。

一. 中井正一の言語論 — メディアとコミュニケーションの問題 —

一九二〇年代後半に発表された論文「言語」（一九二七～一九二八年）において、中井は言語媒体それ自体に注目し、その歴史的推移と思惟の変容を論じている。メディアという言葉が用いられていないとはいえ、実質的には、そこでメディアと思惟の関係にかんする問題が論じられていたと解釈できる。まず、注目したいのは、この論文において道具的言語観への批判が見られることである。従来、「単なる伝達器」と見なされてきた言語は、「単なる壺であったのではなくして酒でもあった」⁴。一九二〇年代において、中井は、概念的内容を伝達する単なる伝達器としてではなく、感覚的意味をもち得るものとして言語を把握していた。

言語それ自体への関心は、その歴史の変遷と思惟の変容にかんする議論に展開する。ギリシアに関するブチャーの著作に依拠しつつ、中井は、「話されたる言葉」から「書かれた言葉」への推移に対応する哲学的思惟の変容を記述する。それは二者間における思惟の交易（「問答」）から、一つの心の自己生産と自己消費（「説話」）にいたる変容であり、他人に語られる「外なる言葉」から自己に語りかける「内なる言葉」への変容である（もっとも、中井は、「外なる言葉」と「内なる言葉」を対立的に把握するだけでなく、両者の溶融についても指摘している）。彼はまた、弁証法の歴史を記述する際、「いわれたる言葉」より「書かれたる言葉」、さらには「印刷されたる言葉」にいたる言語媒体の歴史に注目している。

一九二〇年代後半において、すでに中井は道具的言語観に対して批判的であった。言語の感覚的意味を前提としつつ、メディアの歴史の変遷と思惟の変容の双方に彼は関心を抱いていたのである。中井におけるメディアと思惟形態の関連性についてはこれまでも論じた点であり、ここでは簡潔な記述にとどめておく⁵。では、次に、中井の初期論考に見られるコミュニケーションの問題を検討することにした。

冒頭でも述べたように、「スポーツの美的要素」の中で中井は「瞬間崩れゆく美しさ」と「息もつかせざる関係の構成」をラグビーに見出していた。この論考が発表された一九三〇年、中井は別の論考「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」を発表しており、そこでも彼はラグビーに言

及している。ただし、後者の場合、ラグビーは言語活動との関連で言及されている⁶。「ラグビー球戯において、発言と聴取の両形態を二つの対立するチームと考え、常にゴールを志向する球を意味の志向性とするならば、競技者によってゴールに運ばる球はすなわち意味の充足作用であり、その方向と直角にパスして他の競技者に球をわたすこと、そして彼をしてさらにゴールに突き進ましむること、そこにすなわち意味の拡張方向における作用がある」⁷。

この一文は、読者に奇妙な印象を与えるかもしれない。しかし、この比喩に注目した先行研究が存在する⁸。竹内成明氏によれば、「ラグビー競技において二つのチームがぶつかりあってこそ、競技者一人一人の行為に意味が生じてくる……ゲームがあって一つ一つの動作に意味が生まれ、発言があって一つ一つの記号に意味が生じてくる。私たちはともすれば、そこを逆転させる」⁹。ここで指摘されているのは、ラグビーの比喩が通俗的言語観を転倒する潜在的可能性であろう。理論的見地からすれば、記号の意味は錯綜した動的状況において生起すると考えられる。しかし、社会通念において、記号の生成過程は忘却され、意味は所与の実体と見なされる。ラグビーの比喩は、この実体的言語観を転倒するポテンシャルをもつのである。私見では、この指摘は「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」において中井が明示的に語っていない事柄であり、論考に含まれた論点を創造的に展開したものと思われる。ここで確認したいのは以下の点である。「スポーツの美的要素」で中井は、言語と将棋（チェス¹⁰）を論じたソーシャルに言及した後¹¹、「関係の構成」としてラグビーを記述していた。そのラグビーが、「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」の中で、言語活動に譬えられていたことは、中井思想における存在論的側面とともに、看過されるべきではない。

では次に、ラグビーの比喩によって中井が明示的に説明している事柄を確認することにしたい。「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」で中井が注目するのはラグビーが「二つの対立するチーム」からなるということである。それは言語活動における発言と聴取の区別に対応しており、また意味の充足作用と意味の拡張方向における作用という区別に譬えられている。

意味における充足と拡張は、内なる言葉と外なる言葉という対比に関連する。意味の充足的作用とは自分が自らに語る内なる言葉や思惟の領域における作用である。他方、意味の拡張方向における作用が見出されるのは、外なる言葉、あるいは主張としての意味領域である。主張は「一つの確信をそれと同一意味をもって他に確信を要求する」方向であり、「相手の承認を要求」する。仮に、「SはPである」という命題を他者に対して「同方向への意味充足を予想して手わたす」時、その命題は意味の拡張方向を指していることになる。

内なる言葉における意味の充足的作用、そして外なる言葉における拡張方向の作用。中井は、芸術を例として、これらの対比に意味の質的深化と量的展開という対比をつけ加えている。芸術作品とその作者との関係は、意味の充足的方向におけるものであり、そこには意味の質的深化が見出せる。これに対し、芸術作品を他人に提示する行為は拡張的方向におけるものであり、ここでは意味の量的展開が見出せると中井は述べる。

こうして、発言と聴取、創作と発表、内なる言葉と外なる言葉、主張と確信、意味の充足的作用と拡張方向、意味の質的深化と量的展開などの術語群があらわれる。これらの言葉は中井の思考におけるコミュニケーション的側面を際立たせるものであると同時に、その深みをも示している。まず、第一に、古典的議論において、コミュニケーションの機能は意味伝達とされるのに対し、中井は単に意味充足について言及するのみならず、意味の拡張やその量的展開について述べている。受容研究やディスコミュニケーションの観念に通じる視点が見出されるわけである。しかも、中井は意味の充足と拡張を二項対立としては捉えていない¹²。第二に、内なる言葉と外なる言葉という言葉が示すのは、中井が既に個人内部におけるコミュニケーションと個人間のコミ

コミュニケーションという問題を論じていたということである。これは発言と聴取の問題に関連している。第三に、言語における発言と聴取の区別は、コミュニケーション論における送り手と受け手の区別を想起させるかもしれない。ただし、後に述べるように、中井の場合、発言と聴取は交叉する関係にある。

中井は発言と聴取を排他的な対立において捉えたわけではなかった。中井は、発言者における聴取者の存在を指摘しているからである。私がある命題について発言する時、自我の外なる聴取者である他人は判断を留保しながら、肯定でも否定でもない無関心の状態でそれを聴く。だが、そればかりではない。発言する私のなかの内なる聴取者もまた、判断中止の無関心な状態で、その発言を聴いているかもしれないのである。したがって、聴取者は、発言者の外にいただけではなく、発言者の内にもいるのであり、「私たちは、私たちの中にもまた、聴取者をもっているということである」¹³。ここでは、発言者と聴取者という図式に加えて、発言者における「自我の内面なる聴取者」、そして「自我の外なる聴取者」を考えることが可能になる¹⁴。

このように、中井の言語論にはメディアのみならず、コミュニケーションに関わる問題系を見出すことができる。とりわけ、内なる言葉と外なる言葉という術語は二つの問題系において用いられていることから、これらの術語は両者の接点と考えられる。その後、これらの問題系は、論文「委員会の論理」に組み込まれ、発展的に論じられる。この論考で中井は、古代、中世、近代の文化に対応する「いわれる論理」¹⁵「書かれる論理」「印刷される論理」というメディア史的な図式を提示し、それらの諸論理を実践において再編成する「委員会の論理」を構想した。集团的コミュニケーションに関する観念を考察する手がかりが、この「委員会の論理」に含まれていることは論をまたない。では、次に、集団と集团的芸術の探究を検討しつつ、中井における集団や集团的思惟の概念について確認し、その後、論文「委員会の論理」を概観することにした。

二. 集団と芸術をめぐる探究 — 集团的思惟の模索 —

一九三〇年の論文「機能概念の美学への寄與」において、中井は、事物を実体としてではなく関係項として把握する機能概念を導入していた¹⁶。中井による機能概念の受容については既に論じたため本稿では詳述しないが、それは、今日、私たちが関係論的思考と呼ぶものに対応する¹⁷。一九三〇年の日付がある未刊行の草稿「集団美」では、以下のような記述がある。「集団の言葉の感じには、機能とその複合、すべてがその要素であり、その要素相互間の統制による『秩序としての多数』の意味がともなっている。どこかに中心体があるのではない。むしろ、固体が常に重々無尽に全体に浸み透っているところの一つの関連形態である」¹⁸。ここにおいて、集団は、単に実体としての個人が集まったものとしてではなく、相互依存的な関連形態とされている。このような集団をめぐる思考は中井が美学者として行った探究によって発展したものである。

中井は既存の美学から逸脱するものに注目し、新たな美学を模索した。とりわけ、彼が目したのは個人によって制作された既存の芸術ではなく、集団美ないし集团的芸術であった。当然、中井における新たな美学の探求は、集団それ自体の探求と交差する。たとえば、ラグビーは両者に関わる主題を提供したといえよう。ラグビーの美について中井はこう述べている。「十五人のラグビーが一つの組織の上にならざる関連的構成」を形成すること、そこに「各要素の組織の美しさ」が見出されるのだ、と¹⁹。ラグビーのチームは相互に規定しあう動態的關係としての組織を具現しており、新しい芸術の要素を持つものと見なされている。さらに中井は、ラグビーの「チーム全体が一つの集团的実存的性格」であることをも指摘している²⁰。

「相互の共同性」や「集団的実存的性格」について言及しているとはいえ、中井の論じるラグビーを調和的イメージでのみ捉えて良いのかという点については慎重であらねばならない。「ボート、ランニング、水泳その他フィールド競技の多くのものは競争において、単一的であるに反して、野球、蹴玉、のごときものは多くの要素の複合であると同時に、逆方向すなわち妨害行為を含んでいる意味で二方向的である。……前者においては比量に積極的否定性がないのに反して、後者は明らかに逆関係的否定性が包含されている」²¹。ここで注目されているのは「逆方向すなわち妨害行為」を含むという意味におけるスポーツの＜二方向性＞である²²。そしてこの直後、中井はラグビーにおいて「見えざる力の波紋が二方向的に作用する」ことに言及している。したがって、ラグビーもまた、中井にとって「逆関係的否定性」を含む二方向的なものと考えられる。このことは、ラグビーの比喩において中井が「発言と聴取の両形態を二つの対立するチーム」と述べたことを解釈する上で示唆的である。

さて、スポーツの他に、集団と新たな美をめぐる探求の手がかりとなったのが映画である。当時は比較的新しい研究対象であった映画を論じるなかで、中井は集団的思惟にかんする考察を深めている。では次に、映画及び集団的思惟の機構をめぐる議論を確認することにしたい。

中井が映画に注目した背景には芸術制作における転換がある。それは個人によって作られる芸術から集団によって作られる芸術への変化である。「思想的危機に於ける藝術並にその動向」(一九三二年)の中で、中井は、芸術を創作する主体が個人から集団へと移行した点に注目し、芸術における個人主義の空疎化を指摘している。天才と独創と美というロマン派的観念は、それが確立された当初、正当な権利を保持していた。しかしながら、中井の時代において、芸術を制作するのはもはや個人的天才ではなく、利潤と結びついた組織集団となった。芸術における個人主義は利潤を目標とする集団主義に解体してしまったのである²³。

この時、芸術の集団的組織化を行っている領域として中井は映画に注目する。そこには「レンズを眼とし、委員会を決意とし、企画をその夢想とし、統計をその反省とするところの一つの利潤的集団的機関」が見出せる。映画において進行していた集団的組織化の動向を手がかりとしつつ、個人主義機構から集団主義機構への転換に追いつき、追い抜く新たな美学を模索することが中井の課題となる。彼は個人の思惟と集団的思惟に関する次のような図式を提示する。個人の記憶は集団における記録に対応し、個人の構想は集団における企画である。個人の思弁は集団における委員会的討議であり、個人における反省は集団の批判会に対応する。心身の関係における個人の技術は、集団における機械と組織と統制である。

映画を一つの手がかりとして、中井は集団主義機構の図式を提示したわけである。そこで用いられていた言葉 — 「委員会的討議」、および「批判会」 — に着目するなら、「委員会の論理」に結実する構想の萌芽を確認できよう。ただし、委員会という言葉を検討する際、中井における集団の含意を確認しておく必要がある。第一に、中井における集団は単に諸個人が集まったものとしてではなく、相互依存的な関連形態として把握されている。第二に、集団における「要素相互間の統制」について語る一方、中井は集団の対立や分裂にも言及している。まず、ラグビーの対立するチームに関する記述では、集団における相互依存性のみならず、集団間の対立 — 「逆関係的否定性」 — が注目されていた。後に、「委員会の論理」において中井は、カッシーラーに由来する機能の論理を限定的に取り入れる立場に移行するのだが、そこで重視されるのは主体性の中にある分裂や自己関係的な否定という、ヘーゲル的な主体性の観念である。この局面においては、集団間の対立というよりはむしろ、委員会でなされる批判、あるいは集団における分裂の契機が注目されることになる。中井の委員会について考えるためには、相互依存的な関係性のみならず、自己関係的な否定性についても考慮しなければならないのである。

三. 委員会の論理と集団的コミュニケーション

一九三六年の一月から三月にかけて、中井は『世界文化』誌上で論文「委員会の論理」を発表する。『世界文化』は、唯物論者と自由主義者の連携という人民戦線的編成によって刊行されていた同人雑誌である。同年七月、大衆的な隔週刊の新聞『土曜日』が創刊されるが、巻頭言を執筆するなどして、中井はこれに積極的に関与している。「委員会の論理」は、中井が反ファシズム文化運動に関与している時期に執筆され、発表されたのである。

現在、普及している「委員会の論理」は一つに編集されたものであるが、発表当時は、上・中・下の三篇に分けて『世界文化』に連載されていた。ここで「委員会の論理」の見取り図を示しておくならば、まず、上篇（一節～五節）で提示されるのは、各文化段階における論理の歴史に関わる図式とその説明である²⁴。古典文化、中世文化、近代文化における「いわれる論理」、「書かれる論理」、「印刷される論理」という有名な図式がそれである。これは本稿の第一節で言及したメディアと思惟の関係をめぐる問題を発展させたものと思われる。次に、中編（六節～九節）では、これらの「いわれる論理」、「書かれる論理」、「印刷される論理」が歴史的な文脈から引き離され、各々、思惟、討論、技術、生産という言葉に言い換えられて説明される²⁵。まず中篇の前半では、討論と思惟の区別、ならびに連続の分析が試みられる。これは本稿の第一節でコミュニケーション的問題と呼んだものに対応する議論である。中編の後半で中井は、技術、及び生産の論理を説明する。下篇（十節～十六節）の冒頭でも技術と生産の論理が言及され、商品化と専門化が知の領域に生み出す否定的帰結が述べられる²⁶。そうした状況から離脱するための試みとして提示されるのが実践の論理である。思惟—討論の論理と、技術—生産の論理が結びつくのは、実践の論理を通してである。そして集団的コミュニケーションの観念を読み込むことができるのは、この実践の論理をめぐると述べている。では、以下で「委員会の論理」の概要を確認することにしたい。

まず、冒頭で指摘されるのは、論理学は厳密性を求める学であるにもかかわらず、「論理」という言葉が明確ではないという点である。というのも、文化の推移において論理が果たした役割が考慮されないため、この言葉には区別されるべき多くのものが盛り込まれているからである。これに対して、歴史的变化を超越するものとして論理を提示するのではなく、論理の様々な現象形態を中井は提示する。古代、中世、近代の文化における、「いわれる論理」、「書かれる論理」、「印刷される論理」という図式がそれである。以下で中井の議論を紹介するが、ここでの関心は、歴史的記述としての正否を見定めることではなく、中井の理論的モデルを確認することにある。

中井によれば、古代ギリシアにおける論理の形態には、人々を論服せしめるための合理性が染み込んでいた。氏族制の崩壊と奴隷制の爛熟期にあって、街の広場が論理の発生する酵母であり、弁論が大衆を動かす重大な力をもっていた。ギリシアにおいて書くことが軽蔑の対象とされていたことも勘案して、中井は、これらの段階を「いわれる論理」と呼ぶ。

「いうこと」においては、その言葉を多くの人が様々に「解釈すること」や対立的な論争が可能である。これに対して、「羊皮紙に書くこと」においては、「一方的」で「一義的な意味志向」が要求され、一つの言葉が一つの意味を志向するという考え方が成立する。「書くこと」の成立過程に対応する社会制度は奴隷制の自己崩壊と封建的宗教制度への移行であり、教会に対する哲学の従属である。この社会制度のなかで「書くこと」の作用は中世における瞑想の生活の意味を分裂させ、聖書を解釈する論理と常識的な認識の論理という背離を生み出すことになる。

交通の発達と商業の勃興によって紙と印刷術がまきちらされた後、活字的な思惟形態が現れる。「こゝではすでに、『言われる論理』『書かれる論理』に對しては、『印刷される論理』が生じつゝあるのである。……こゝでは言語意味はすでに一義的な意味志向が許されなくして、活字となつて公衆の中に言葉が手渡しされる時、既に公衆の各々の生活経験と各々異つた周囲の情勢にしたがつて解釋される可能の自由があたへられるのである。……この言葉の解釋の新しい形態が活字であたへられることで、ジャーナリズムなる新たな公衆性が生じたのである」²⁷。言葉の理解に一義的な意味志向が要求された「羊皮紙に書くこと」の段階とは異なり、「印刷される論理」における言語は、一義的な意味志向とは異なるものとして特徴づけられている。言葉が活字として公衆に手渡される時、各自の生活経験、および異なる周囲の情勢にしたがつて「解釈される可能の自由」があたえられる。こうした言葉の解釈の新しい形態とむすびついてジャーナリズムなる公衆性が生み出される。

「委員会の論理」の上篇では、文化と論理の歴史が図式化されていた。「いわれる論理」、「書かれる論理」、「印刷される論理」等の言葉が示すように、中井の議論では論理の現象形態が、メディアとコミュニケーション、および社会制度の歴史と関連付けながら把握されている。もっとも、ここで私たちが注目するのは、中井が提示した図式の歴史的妥当性ではなく²⁸、図式の背後にある発想である。

中篇においては、「いわれる論理」と「書かれる論理」は、「討論」と「思惟」という術語に言い換えられている。それによって、議論は歴史的な文脈から引き離され、討論と思惟の区別ならびに連続が分析されることになる。討論と思惟という対比は、言語論で用いられた外なる言葉と内なる言葉の対比を想起させるものである。討論の領域においては主張があり、思惟の領域においては確信がある。それらは、意味の量的方向と質的方向という二つの方向軸に対応する。これら討論と思惟の区別を示すのは、虚言の問題である。虚言は、内的確信において肯定しているものを外的主張において否定をもって承認を求めること、あるいは逆に、内的確信において否定しているものを外的主張において肯定をもって承認を求めることである。

討論と思惟の区別について論じた後、中井は両者の連続性をも説明する。ここで手がかりとなるのは否定判断の問題である。「この薔薇は白い」という命題の場合、先行する問いなしに肯定できる。しかし、「この薔薇は赤くない」という否定判断の場合、まず「この薔薇は赤くないだろうか」という問いが作られた後、現象の再検討をへて、追加的にその問いが評価される。否定判断が出現する契機となる問い——「この薔薇は赤くないだろうか」——は判断の中止、あるいは評価を保留する状態に対応する。重要なのは、この状態が、思惟の領域のみならず、討論で承認を求められる人々の「聴く立場」の機構にも見いだせることである。思惟の後、確信するにいたったある命題に対し、判断を保留しつつ内的評価した後に主張へと転じたのが「いう立場」だとすれば、討論でその表象結合を聴く人々もまた評価を保留する。評価の明瞭な中止という点において、「いう立場」と「聴く立場」、主張と確信のあいだに中井は連続性を見出している。この議論には、主張する発言者の内部における聴取者という、言語論で提示された論点が反響している。

思惟と討論の区別ならびに連続性を説明した後、中井は技術および生産の論理を説明する。まず、中井は、カッシーラーに由来する機能概念（関数概念）について述べる。中井にとって、機能概念は関係論的思考を美学的問題に導入する契機となり、また形而上学的対立を批判する手がかりとなったものである。しかし、「委員会の論理」においては、かつて実体概念の抽象性を克服すると考えられた機能概念は再び抽象に転化したと見なされるようになる。もっとも、機能概

念が完全に放擲されたわけではない。その抽象性が指摘される一方で、それが技術の論理に寄与する可能性も指摘されている。機能概念に対する評価はアンビヴァレントなものであったといえよう。

中井によれば機能の論理と技術の論理は相互補完的である。単なる骨組みに過ぎない機能概念に対しては技術の論理によって方向が与えられる。しかし、技術の論理はそれ自身では限界をもち、生産の論理に関連づける必要がある。非現実と現実の相互転換をもたらす技術は人間的目的的活動への方向があった。しかし、再生産の過程において、この人間的目的性が他のものに転化する危険性がある。これに対して、合理性の解明を行うのが生産の論理である。

思惟、討論、技術、生産について説明した後、中井は、「現段階」の概念構成がもつ特徴について次のように分析する。まず、概念は商品的性格を帯びることで、人間的目的の方向にそった批判を欠いた「無批判性」の性格をもつことが指摘される。次に、分業化、あるいは知的技術の分野における専門化によって生じる問題としては、協同的統一性からの遊離という「非協同性」の現象が指摘される。現段階において、概念は商品性の性格によって無批判的なものとなり、専門性の性格によって無協同的なものとなっているというのである。大衆にとって、概念の一般性は失われ、概念は桎梏化している。

概念の一般性を回復し、「委員会そのものの桎梏化」から離脱するために中井の提示するのが「実践の論理」である。無批判性に対しては、思惟と討論の総合としての審議性を確保しなければならない。他方、無協同性に対しては、技術と生産の総合としての代表性が必要となる。こうして、思惟—討論の論理と技術—生産の論理の総合、審議性と代表性の実践性によって成立するのが「実践の論理」である。

中井によれば、まず現実的地盤と結びついた〈提案〉があり、〈計画〉と〈報告〉、さらなる現実的地盤よりの〈批判〉、これら四つの契機を経て、再び〈提案〉へと回帰する過程が「実践の論理」である。委員会で提案がなされると、多くの質問と説明と討議をへて決議にいたる。こうして審議の段階が過ぎ去ると、提案は組織に委任され、実行にうつされる。決議にいたった提案が実行をへると、それは報告の対象となる。ここで、当初の計画と報告の間にずれが見出される場合、現実的地盤への再検討による是正をへて、新たな計画が生み出される。報告は新たな計画へと向かう媒介となるのである。

留意すべきなのは、第一に、この実践の論理をめぐる記述において集团的コミュニケーションの一形態が論じられており、それは「委員会の論理」の中で重要なものとして位置づけられているという点である。「いわれる論理」「書かれる論理」「印刷される論理」など、歴史上に現れた論理の現象形態は対立物に転化しつつ、「委員会の論理」の構成要素となる。その際、これらの諸論理を総合する重要な契機となるのが〈提案〉、〈計画〉、〈報告〉、〈批判〉という実践の論理であり、これが委員会での集团的コミュニケーションに対応している。第二の点は、委員会における〈批判〉が、集団における分裂、あるいは自己関係の否定の契機に対応するというものである。述べたように、機能概念に対する中井の関係はアンビヴァレントなものであった。集団をめぐる中井の記述からは、相互依存的关系にある組織集団のみならず、集団間の対立や集団それ自体の分裂を読みとることが可能であった。この文脈において、委員会における批判の契機は集団における分裂の契機、あるいは自己関係的な否定に対応すると考えられるのであり、関係論的な集団概念特有の静態性や硬直性を回避する役割を果たすものと考えられる。留意すべき第三の点は、実践の過程を素描した中井の図式がメタ言語によっては記述されていないことである。中井は、〈提案〉、〈計画〉、〈報告〉、〈批判〉からなる実践の論理を説明した上で、「委員会の論理」で彼が素描した図式それ自体が一つの提案だと述べている。中井の議論は、集团的コ

コミュニケーションに対して超越的なものとして位置づけられているのではなく、実践のなかで他のものになるものと見なされているのである。

四 集团的思惟と機械

「委員会の論理」を執筆するに先立って、中井は集团的思惟の理論化を試みていた。それは映画における集团的組織化の動向を一つのモデルとするものであった。そして、中井における映画美学の探求は戦後も継続されている。戦後に展開された中井の映画論は、集团的思惟の主題に関わるものである。「委員会の論理」とは異なり、映像が論じられている点、また対面的なコミュニケーションを行う集団とは異なるイメージが提示されている点でそれは興味深いものである。

「現代美学の危機と映画理論」(一九五〇年)で中井は、非芸術と芸術の境界が時代によって移動するという認識に基づきながら、かつて映画が非芸術と見なされた点を指摘している。それによれば、映画は、第一に、利潤を獲得する手段であり、第二に、集团的に製作されるものであり、第三に、レンズやフィルムといった物質によって製作されるという意味で、描くものの主観がない²⁹。かつて映画はこれらの三点によって非芸術的とみなされたのであった。しかし、映画が芸術と見なされるようになった以上、かつて映画が非芸術とされた特徴は美学を新生面に導くと中井は考える。「この世紀の初頭にあたって映画が非芸術とされたこれらの三点は、……美学論をかえってくつがえすテコの三支点ともなりつつあるかのようである」³⁰。

さらに中井は、コブラ(繫辞)という言葉を用いて独自の映画受容論を展開している。何かに関する判断を示して「AはBである」と言う場合、主語Aと述語Bをつなぐ「である」という言葉をコブラと呼ぶ。文学の場合、表象は「である」「でない」というコブラによって結合しうる。しかし、映画ではコブラなしにカットとカットが連続されている。たとえ、製作者が何らかの意図をこめてカットとカットをつないだとしても、またトーキーや字幕がコブラの役割を果たすとしても、カットとカットを連続するのは大衆の嘆き、憤りであると中井は考える。この場合、映画が集团的に製作されるという点に加え、創作の仕上げを観客がおこなうという意味においても映画は集团的である。

戦前に中井が素描した集団主義機構の図式、及び彼が主として戦後に提示した映画受容論の間にはいくつかの相違がある。第一の点は、芸術の創作と受容に関する相違である。集団主義機構の分析で例として言及されたのは、映画製作に関わる利潤的集団であった。これに対し、コブラをめぐる議論では芸術を受容する側の大衆が主に言及されている。

第二の点は、集団の特徴に関わる相違である。通常、委員会という言葉は、対面的状況にある集団を想起させる。これに対して、カットとカットを連続する大衆というイメージが提起するのは、非対面的な状況で散在しつつも映画によって媒介された集団のイメージである。それはタルドの公衆を想起させるが、新聞ではなく映画の観客である点に特徴が認められよう。

この集団のイメージが示すように、中井における集团的思惟の機構は人間のみならず機械をも含むものとされている。「芸術における媒介の問題」(一九四七年)で中井は次のように書いている。「今や、歴史的段階は、個人的意識段階を乗り越えて、集团的意識段階に向いつつある。……機械的技術を中に含めて、レンズ、フィルム、電話、真空管、印刷などの機構を貫いて、物質的感覚ともいうべきものが、集団人間の感覚として、表現、観照の要素となりはじめた。それらの感覚要素を素材として委員会という近代的集団思惟の機構は、個性単位の意識を越えたる新たな性格を、人間社会に導入するにいたった」³¹。人間と機械的技術の双方を構成要素とするという意味で、中井における集团的思惟の機構は異種混交的性格を持つのである。

言語論におけるメディアとコミュニケーションの問題をはじめとして、集団の関係論的把握ならびに集団における分裂、集団的芸術と集団的思惟の構想について確認してきた。集団と芸術を探究する中井の試みは、個人によって制作された芸術から集団的芸術としての映画へと対象を拡張し、対面的状況における集団的思惟のみならず映像メディアによって拡張されたそれをも描き出した。その試みはまた、メディアの受容美学を素描する先駆的な仕事であったとも考えられよう。

注

- (1) 中井正一「スポーツの美的要素」, 久野収編『中井正一全集1』美術出版社, 一九八一年, 四一〇~四一一頁。
- (2) コミュニケーション論的視点からなされた中井研究の重要なものに関しては, 拙稿「中井正一研究とメディア社会学の視点」『社会関係研究』第四巻第二号, 一九九八年で論じている。
- (3) 中井は委員会について論じてはいるが, その際, 「集団的コミュニケーション」という言葉を用いたわけではない。本稿は, 集団的コミュニケーションとの関連から, 中井の諸論考に散見される問題を整理し, 再構成する試みである。
- (4) 中井正一「言語」, 久野収編『中井正一全集1』美術出版社, 一九八一年, 二一六頁。
- (5) 中井正一におけるメディアと思惟形態の関連性の問題については, 拙稿「技術と媒介の社会学」『年報人間科学』大阪大学人間科学部, 第二〇号, 一九九九年所収を参照されたい。また, この問題は, 拙稿「中井正一再考 — 集団的思惟の機構について — 」『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』, 二〇〇二年, 第三号所収, においても論じられている。
- (6) 豊崎光一は, かつてラグビーの比喩を用いたことがある。「翻訳者は, 単にもう一人の遊動的ハーフとして, パスされたボールをあちこちにパスすること, ただそのみを心がけた」(『リゾーム』朝日出版社, 一九八七年, 九頁)。もちろん, ここには中井への言及はない。私見では, 言語活動とラグビーのアナロジーという点において両者は共通しているが, 豊崎の場合, 言語活動一般ではなく, (書物の執筆や) 翻訳に言及していることに特徴が認められる。また, ボールがゴールへと運ばれること, 換言すれば意味の充足作用といったものは, 「『意味』の専制」なき『リゾーム』の翻訳者にとって言及する必要のないものであったようである。
- (7) 中井正一「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」, 久野収編『中井正一全集1』美術出版社, 一九八一年, 二六六~二六七頁。
- (8) 佐藤毅「同化と異化」, 江藤・鶴見・山本編『講座・コミュニケーション6 コミュニケーションの典型』研究社, 一九七三年。竹内成明「『意味の拡張方向』についてのノート」『評論社会科学』, 一九七七年, 第一二号。
- (9) 竹内, 前掲論文, 一四頁。
- (10) 現代では, 将棋ではなく, チェスと翻訳されていることは周知の通りである。「チェスの駒の価値というのは体系から, 諸条件がからみあう全体から出ているので, 各駒に固有の価値から出ているのではない。」(フェルディナン・ド・ソシュール, 前田英樹訳『ソシュール講義録注解』法政大学出版局, 一九九一年, 七六~七七頁)。なお, 『哲学探究』において, ウィトゲンシュタインもまたチェスの比喩を用い, 次のように述べている。「一つの駒(石)の意味とは, ゲームの中でそれが果たす役割である, と言おう」(ウィトゲンシュタイン, 藤本隆志訳『ウィトゲンシュタイン全集8 哲学探究』大修館書店, 一九七六年, 二九九頁)。ここで, ある種の誤解を避けるために補足的説明を行うならば, スポーツとしての「遊戯」

について論じた際、中井はフッサールやソシュールが「将棋」(チェス)を論じていることに言及しただけであり、中井の文章には規則をめぐる記述はない。そもそも、『哲学探究』は一九三六年に書きはじめられたとはいえ、出版されたのは中井の没後、一九五三年である。また、ここではポール・グライスによるウィトゲンシュタイン批判について検討することは差し控えておく。

- (11) 「ソッシュールは将棋の運用構造を言語哲学的構造に適用して、相似的代入に成功している。スポーツが存在の内面的組織構造の象徴的運用ではあるまいか? という問はスポーツの上に投げかけるべき親しき問であると私は考える」(中井正一「スポーツの美的要素」, 久野収編『中井正一全集1』美術出版社, 一九八一年, 四〇九頁)。私見では、「存在」という言葉が示しているように、中井の議論はソシュールを前提としつつも、それとは距離があるものと思われる。
- (12) 論文「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」の末尾において、中井は意味の充足方向と拡張方向の相互転換について論じている。
- (13) 中井正一「発言形態と聴取形態ならびにその芸術的展望」, 久野収編『中井正一全集1』美術出版社, 一九八一年, 二六二頁。
- (14) 中井正一「意味の拡張方向ならびにその悲劇性」, 久野収編『中井正一全集1』美術出版社, 一九八一年, 二六五頁。
- (15) 原文では「言はれる論理」と表記されている。
- (16) 中井正一「機能概念の美學への寄與」『哲學研究』, 第七十六号, 一九三〇年十一月号。
- (17) 注五で言及した二つの拙稿を参照のこと。
- (18) 中井正一「集団美」, 久野収編『中井正一全集2』美術出版社, 一九八一年, 一八四頁。
- (19) 中井正一「スポーツ美の構造」, 久野収編『中井正一全集1』美術出版社, 一九八一年, 四四八頁。
- (20) 中井正一「スポーツ気分の構造」, 久野収編『中井正一全集1』美術出版社, 一九八一年, 三九九頁。
- (21) 中井正一「スポーツ美の構造」, 久野収編『中井正一全集1』美術出版社, 一九八一年, 四二八頁。
- (22) 中井における双方向性および二方向性の問題に注目した研究としては後藤嘉宏, 「中井正一とコミュニケーションの双方向性」『マス・コミュニケーション研究』, 五七号, 二〇〇〇年がある。ただし, 「逆方向すなわち妨害行為」を含むスポーツの<二方向性>, あるいは「逆関係の否定性」についてまとまった言及はなされていないようである。
- (23) 中井正一「思想的危機に於ける藝術並にその動向」『理想』, 第三十五号, 一九三二年九月号。
- (24) 中井正一「委員會の論理(上) — 一つの草稿として — 」『世界文化』, 第一三号, 一九三六年一月号)。なお, 「委員會の論理」については小学館の復刻版を参照。
- (25) 中井正一「委員會の論理(中) — 一つの草稿として — 」『世界文化』, 第一四号, 一九三六年二月号。
- (26) 中井正一「委員會の論理(下) — 一つの草稿として — 」『世界文化』, 第一五号, 一九三六年三月号。
- (27) 中井正一「委員會の論理(上) — 一つの草稿として — 」『世界文化』, 第一三号, 一九三六年一月号, 七頁。
- (28) ここで、中井の議論とは異なる見解が存在していることを指摘しておきたい。たとえば、文字文化に一義的な意味を見出し、活字文化に多様な解釈の可能性を見出す中井の記述はマク

ルーハンのそれとは対照的である。後者の場合、聴覚的な写本文化における文字に多義性が想定され、視覚的な活字の中に一義性が認められている。

- ②) 現代において、映画を作家の作品として位置づける見解が一般的となっているのは周知の通りである。この視点からすれば、映画には描くものの主観がないという中井の指摘はむしろ歴史的な興味を喚起するものと考えられよう。
- ③) 中井正一「現代美学の危機と映画理論」、久野収編『中井正一全集3』美術出版社、一九八一年、一八九頁。
- ④) 中井正一「藝術に於ける媒介の問題」『思想』第二七五号（一九四七年二月）、久野収編『中井正一全集2』美術出版社、一九八一年、一三三頁。

付 記

『中井正一全集』からの引用にあたっては、労を厭わず、文献名を繰り返しあげてある。読者の便宜となれば幸いである。